

「気遣い」や「気配り」を教えたものが多いのが特徴です。いずれも、もう一度今の暮らしを見直すべき原点だと考えられています。

今は、われわれの見える範囲に「子どもの活動」がほとんどありません。多くは、親や大人が先回りして準備し、子どもがやるべきことを奪ってしまっているように思われます。子どもにはもっと遊ばせ、体験を積ませる必要があると考えて、巾さんたちは自然の中へ子どもを連れ出す活動をしています。大人も子どもも「現場」へ連れて行く、その機会をつくり、一緒に「場づくり」をする。そして「成果をほめて」「次の段階への課題を投げかける」。これが名古屋市青少年参画フォーラムの活動の考え方であり、手法です。

こうした考え方で、1993年から牧の池中学校の生徒たちと、通学路にある「牧野ヶ池（名東区梅森）」の清掃活動を始めました。この池は名古屋城とほぼ同じ頃に築造されて、約400年を経ています。長らく灌漑用ため池として維持・管理されてきましたが、水利が整うにつれて放置されるようになった池です。最初は生徒会から「何とかしたい」という相談があり、家庭ゴミから産業廃棄物まで捨てられていたのを少しずつ拾い出し、一部だがきれいになった「成果」を確認しあいました。それが次の学年にも次の学年にも引き継がれている間に、捨てる人が減り、誰の目にもきれいになっていきました。途中からは親も参加するようになって、清掃活動のテンポも速まりました。

こうした活動への参加を通じて、子どもたちも親たちもさまざまな「環境問題」や「自然とのかかわり」に関心を深めるようになります。この子たちが間もなく社会へ出て、暮らしの中で、あるいは後輩たちに、環境や自然への関心を広げてくれれば、少しずつ社会を変える力にもなると考えられています。この会はほかにもいろいろな取り組みをしていますが、ここでは1例だけ報告しました。

学校を通じた活動では、小学4年生から中学3年生まで環境学習に招かれていますが、自然への関心を入りに虫や草木に気づかせ、そこから「いのちの大切さ」を考えるように進めています。巾さんは、こうした子どもたちと一緒に自然にかかわる活動を通じて、地域自体も変わっていくだろうと考えています。

### 3 「カタリベカフェ」で交流をはかる

（報告者：読書会を主催している 大橋弘宣氏＝システムエンジニア）

大橋さんたちがやっておられる「カタリベカフェ」は、2006年6月から、月1回のペースで開催している本の合評会です。会場はだいたい決まった小さい喫茶店です。ホームページで開催日時と会場を知らせ、各自が読んで面白かった本を紹介しあう形で進められています。会費や会員登録はなく、当日のお茶代を自己負担するだけ。1回に集まるのは10人以下ですが、途切れることなく、集まると本の内容や関連する話題で盛り上がります。大橋さんはこうした活動を通じて「本を使ってコミュニケーションする面白さ」を楽しんでもらえれば……、と考えておられます。

当日どんな本が紹介されるかは集まってみないとわからないし、当然ジャンルはばらばら、知らなかった本も多いので、「共通のポイント」を探るのが大橋さんの仕事です。しかし、こうやって好きな本やその内容を話し合うことを通じて、「会話」の楽しさや、自分とは違う理解や考え方を学びとったり、気づいたりできます。さらにそれをつないだり、関連させて広げたりすることも楽しいことです。

大橋さんがこうした「カタリベカフェ」を始めた発端は、本は溢れているがそれを使って遊ぶ場や話し合う場がないのに気づいたことです。始めたのは名東区ですが、大橋さんの出身地が三重県で友人もたくさんおられるので、最近では三重でも週1回ずつ開催しておられます。本をコミュニケーションツール（意志を通じ合う道具）として、あちこちで同じような活動が行われるようになり、それらをネットワーク化すれば、もっと楽しみが増えそうだとおられます。

「本好きな人の中には閉じこもりがちなのも少なくないので、こうして『人の交流』の場が提供できることも社会貢献かな……」と大橋さんは語られました。

### 4 もう一つの読書会

大橋さんの報告に関連して、2008年のこのシンポジウムで紹介された、名東区のもう一つのタイプの読書会についても紹介しておきます。主催者は山本多津也さん（自営業）です。

「読書をビジネスに役立てよう」を合言葉に「読書会（正式名称はアウトプット

読書会)」を開いている山本さんは、現在公式には名東区と東京で月1回ずつ読書会を開催していますが、実際には、あちこちに本店や分店(?)ができ、山本さんが直接参加しない読書会も含めると全国で毎月6~7回ずつ開催されている様子です。とくに会費などは取っていませんが、会員登録して参加する仕組みになっています。そのホームページでの紹介によると、「本を読むのが苦手という友人から相談を受けたのがきっかけだ。小規模な読書会だったのが3カ月後、クチコミで30~40人に拡大。2007年に連絡用にと、SNS「mixi」でコミュニティを立ち上げると、2年後には1,000人が集まった。今(2009年10月)では2,700人以上が登録している」と紹介されています。

読書会の開き方は、まず山本さんが選んだ「課題本」を、開催日の1カ月以上前に会員制ホームページで、日時と場所とともに知らせます。最近では1回の読書会で100人前後が集まるので、初期のように喫茶店というわけにいかず、会議室などを借りて開催しています。参加費は会場費でいい。「課題本」としてはその時々話題になっているビジネス書が多いが、時にはカーネギーの『人を動かす』のようなベーシックなものも選ばれます。選定基準は「広い意味でビジネスに役立つ」もの。集まるのは20代から30代の人が多いそうです。常連化した人もいれば、本を選んで参加している人や仕事などの都合に合わせて来る人などさまざまです。

夕方6時から始めることが多いが、10人前後のグループに分かれて課題本について意見を述べ合う。必要に応じて山本さんらも参加してポイントを助言することもあります。ルールは「ほかの人の意見を否定しないこと」だけ。いろいろな意見があることを尊重しあいながら、意見をたたかわせます。当然異なる見方や意見の違いも生まれますが、違いは違いとして認め合うことで「多様な視点」を感得することができます。当然のことながら、この集まりは結論を出すところでも意思統一する場でもないの、いわば言い放しで散会になります。

この読書会を通じて山本さんが重視しているのは「アウトプットの重要性」だといえます。ここでいうアウトプットは、「他人に自分の意見を正確に伝えること」を意味しています。自分を高めるためにインプット(知識や情報を吸収する)には熱心な人が多いけれども、肝心のときに必要な情報が伝えられないのでは、ビジネスマンとして不十分です。そこで、こうした場を通じて「自分の意見」を整理し、「それを正確に伝える」訓練を積んで貰うことを期待しているそうです。つまり読

書以上に、「社会人として生きるスキル(基本技術)」を養ってもらうことを期待しています。こうした「キラキラしない実利」が、読書仲間を増やす効果の基盤になっている様子です。

## 5 福祉活動で商店街を活性化

(報告者：NPO 介護サービスさくら主宰 村居多美子さん)

名東区は名古屋の代表的な住宅地域です。1970年代に次々と集合住宅や戸建て住宅が建てられ、名古屋の人口急増に対応しました。そのため区内にはいくつかの商店街や商業集積地域がありますが、その多くは他の地域と同様に1990年代に寂れはじめました。その一つに長さ300メートル近い「西山商店街」があります。

村居さんの出身地三重県では、くらしの基本はご近所の支え合いでした。ところが名古屋へ転居すると近隣関係はばらばら。「支えあい」の必要を感じて、1988(昭和63)年に西山地区の自宅で、有償ボランティアの介護サービス「さくら」を開設しました。手が空いている人には働く機会をつくり、介護される人には親身なサービスを提供しようとしたわけです。その活動の一環として、「さくら」では西山商店街のイベントにも積極的に参加しました。その結果、数年後には「さくら」の拡大が必要になり、表通りである西山商店街への移転を計画しました。1990年代の西山商店街は空き店舗も増え始めており、その利用を兼ねて表通りに出れば一挙両得だと考えたのですが、現実にはなかなか貸してもらえませんでした。

「商店街の中でデイサービスを始めれば買い物客も増える」など、繰り返し折衝するうちに商店街役員さんの斡旋で空き店舗が貸してもらえるようになり、1994年に移転しました。商店街に出たことで業務拡大が可能になり、そのたびに借り受け店舗を増やして、現在は「くらし助け合い(食事・移送・受託事業)」「子ども支援(病児保育・急な残業などの保育)」「指定管理者(福祉会館運営)」「地域支援(名東祭り・夏祭り・各種イベント・小学生の学習など)」「介護保険事業(通所・訪問・居宅・福祉用具レンタルなど)」の諸事業を行っています。高齢者のデイサービスでは、同時に零歳児を預かることで痴呆が回復し始めるなどの効果も現れて好評です。こうして「さくら」への人の出入りが増えるにつれて、西山商店街での買い物や飲食利用者も増え、最近では一度シャッターを下ろした店が営業を再開する例も出始めています。